

書評

齋田幸久 著

胸部 X 線写真ベスト・テクニック
肺を立体でみる長崎大大学院教授・臨床腫瘍学/
長崎大病院がん診療センター・センター長

芦澤和人

齋田幸久先生のご執筆による単行書『胸部 X 線写真ベスト・テクニック—肺を立体でみる』が刊行された。わが国には、胸部 X 線写真に関する数多くの教科書が存在するが、本書は他書とは異なる視点で執筆されている。すなわち、本書のサブタイトルにあるように、胸部 X 線写真の読影において「肺を立体的に捉える」ことに焦点が置かれている。巻頭の「本書の目指すところ」に記載されているが、「1枚の胸部 X 線写真で奥行きが見えること、あるいは、それが実感できること」が到達目標である。

その目標を達成するために、CTの横断像のみならず3D画像やMPR画像が適切に配置されており、読者が胸部 X 線写真上、「肺を立体でみる」ことを助けている。

さらに、極めて明快なシェーマも適宜挿入されており、単純 X

線所見の成り立ちが理解しやすい。胸部 X 線写真はアナログからデジタルに移行してきたが、使用されているすべての胸部 X 線写真は、極めて画質がよく、かつ大きく提示されている。また解説の文字を極力少なくしてあるため読みやすい。私は本書を1日で通読してしまった。著者の豊富な知識と経験に基づいた完成度の高い専門書である。

本書はⅠ～Ⅶ章で構成されているが、基礎編(Ⅰ～Ⅲ章)と実践編(Ⅳ～Ⅶ章)に大別することができる。基礎編では、正常画像解剖と肺内・肺外病変の捉え方について豊富なシェーマを交えてわかりやすく解説されている。後半の実践編は4つの章からなり、各章に10例の厳選された症例が並んでいる。Q & Aの演習形式になっているので、ぜひ1枚(一部側面像も提示)の胸部 X 線写真で肺を立体的に捉えることにトライして

いただきたい。もし、解答で使われている3D画像やMPR画像がイメージできるようになれば、著者の意図する到達目標に達したといえよう。

近年の画像診断機器の進歩は目覚ましく、64列以上のMDCTが多くの施設で標準となってきた。胸部領域の画像診断においてもMDCTは不可欠な検査法となったが、安価で簡便な胸部 X 線撮影が第1選択の検査法であり、その重要性は何ら変わっていない。胸部 X 線写真の読影能力を高めるためには、CT所見を胸部 X 線写真にフィードバックする作業が重要である。この作業を繰り返すことで、単純 X 線所見の成り立ちの理解が進み、さらには「肺を立体でみる」習慣が自ずと身に付いてくる。前述したように、CT画像が多く提示された本書は、まさにその作業のお手本となる教科書である。胸部 X 線写真の読影にあたる若手の放射線科医はもとより、呼吸器疾患の診療に携わる内科医、外科医、総合診療医などが必読されることを期待する。

[B5 頁152 2013年

定価:本体4,000円+税

[ISBN978-4-260-01768-8]

医学書院刊]